

入選

「手紙」

東野圭吾（毎日新聞社）

情報メディア学科 保延杏奈

差別は存在するし無くならない。従来の本であれば真逆のことをメッセージとして読者に送り、こちらもそのメッセージを受け取り、希望に満ちたりたようなすがすがしい気持ちで読書は終了するはずである。

私が読んだ手紙は設定からして従来の本とは違った。主人公は犯罪者の弟、しかも罪状は殺人だ。兄を恨むのが普通なのであろうが兄の動機が動機だった。兄は弟の学費を稼げず、拳銃の果ての犯行であった。両親がおらず、兄が逮捕された主人公。彼は高校生で生活能力もない。担任が紹介したバイトで大学受験こそ諦めたものの生活はできるようになり彼の生活も順調かのように思えた。しかしそれも崩壊してしまう。乗り越え、就職したそんな中、彼に届くのは兄からの手紙だ。拙い文章で送られてくる手紙、複雑ながらも受け取っていた。しかし生活が続けていくうちにその手紙が届くたびに自分の境遇を思い出している自分がいることに気が付いた。その後大学に念願叶って入り、そしてミュージシャンという夢も見つけられ、素敵ガールフレンドもできる。そんな日々も兄からの手紙を見られることで、自分の境遇を知られることでなくなっていく。そんな彼に手を差し伸べたのは高校卒業後就職先で出会った由美子であった。とうとう幸せをつかんだ彼は娘も設ける。定職にも就き、社宅にも住むことができた彼らの隣に兄のことを知る人間が越してくる。そこでまた距離をとられ、築いた社会的立場も危うくなる。そこで社長は主人公に言う。

「世界は犯罪者とその家族には優しくないのだ」と。最後、彼はミュージシャンを目指していた時の友人と囚人に向けてライブをするのだが彼は涙が止まらず歌えない、という描写で終わる。自分が犯罪をした訳でもないのに世界は優しくない。

差別なんて存在しない、みんな仲良く平等だ、なんて考えは偽善だと感じたし読後感も最悪であった。だが、死ぬまでに一度は読んでほしい本だ。